

南アルプス井川地域における在来作物の栽培状況と利用

国立民族学博物館外来研究員 川上 香

1 研究の背景

世界の食料問題が懸念される中、山村の傾斜地農耕システムや、小規模な家族農業の評価が高まっている。南アルプス山麓に位置する静岡市葵区井川地域は、世界ユネスコエコパークの移行地帯に位置し、自然と調和した持続可能な農業が営まれてきた。多くの世帯で自給的農耕が維持され、在来品種も商業的品種（種子を購入して栽培する近代の作物）と共に栽培されている。在来品種は、地域の気候風土や人々の嗜好に合った特性を持っているといわれ、文化的な側面に対する関心も高まっている。しかし、自給用で栽培が小規模なため、栽培の現状や利用方法が掴みにくい。このため、在来品種の栽培方法や暮らしとの関わりは、具体的に明らかにされてこなかった。

そこで本調査では、井川地域の集落を単位として、土地利用の通時的な把握と、調査対象世帯の作物の栽培状況および食利用について明らかにすることを目的とした。

2 研究の方法

井川地域の田代集落（大島地区を除く）5世帯と小河内集落4世帯を対象として、聞き取りと畑の観察を行った。調査期間は2025年、7月・9月・11月中の、のべ17日間であった。また両集落の通時的な土地利用を把握するため、静岡県国土地理院所蔵の1957年完成の井川ダム建設前後の空中写真を閲覧し、静岡県編1991『田代・小河内の民俗-静岡市井川』集落の概略図（9頁・11頁）と現在の土地利用を比較した。また徳島県つるぎ町三木柅地区、猿飼地区で比較調査を行った。

3 研究の成果

両集落は大井川最上流部にあり、田代集落は右岸、小河内集落は左岸に位置する。田代集落は小河内集落に比べると日照時間が短く冷涼な気候である。調査対象世帯が現在維持している農地は、常畑と茶畑であった。1991年の調査と土地利用を比較すると、田代集落の中央の平坦地に集中していた常畑は、現在は耕作されていない箇所が見られた。一方、小河内集落のニシッパラと呼ばれる平坦地に集中していた常畑は、茶畑に転換されていた。今回の調査で、田代集落の割田原（わんだばら）、小河内集落のテラシマダンにも常畑が集中し、集落背後の平坦地や緩斜面には常畑の緑肥用の採草場があったことが明らかになった。割田原は井川ダムのため水没したが、広大で多くの世帯が耕作していたという。テラシマダンは戦後常畑に利用されていたが、現在は茶畑となっている。

作物については、商業的品種も含め、世帯によって7種類から25種類の作物が確認できた。在来品種はキュウリとインゲンが多くの世帯で維持され、次いでダイズ、アズキ、ナス、サトイモが見られた。在来インゲンは、田代集落では秋ササゲ、小河内集落ではタマゴササギが見られた。また、寒さに強いというフユナと呼ばれる青菜が田代集落に見られた。インゲンは、他の具材を加えず煮物にすることが好まれ、フユナは、冬季にニンニクの葉と一緒に煮て味噌汁にすることが慣習となっていた。田代集落に見られるフユナ栽培は、冷涼な気候が関係していると推測された。

一方、比較調査を行ったつるぎ町は、傾斜地農耕システムが世界農業遺産となった「にし阿波」地域に属し、崩れやすい土壌を緑肥で維持し、在来品種を栽培してきたという井川との共通性を持っている。しかし焼畑の経験は聞かれず、茶を支柱にした在来インゲンの栽培方法が共通していた。しかし、獣害のため現在は栽培が中止されている。在来品種のソバ実を雑炊に利用している。カヤを緑肥や農資材にしており、作物の畝間に敷いて泥はねの防止や保湿、雑草抑えにしている。

4 研究の意義と展望

以上、井川地域の集落における土地利用の通時的な変化と持続、在来品種の栽培状況と利用の一端を明らかにした。両集落では過去半世紀以上にわたって常畑が変化しながら持続していた。また在来インゲンと、フユナの栽培事例から、井川地域内であっても集落ごとに継承されている在来品種に違いがあることがわかった。この違いの理由の一つは、気候の差によるものと推測されるが、更に聞き取り調査を重ねて明らかにする必要がある。両集落は焼畑を行ってきたことで知られ1991年の調査では焼畑跡地の緑肥を常畑に利用することで焼畑と常畑は結合していたと指摘されている。今後は、焼畑衰退前の常畑の作物や栽培方法についても調査し、それらの焼畑と常畑の相互関係を解明することができれば、土地利用と作物の総合的な変化と持続状況、通時的変化を踏まえた自給的農耕の持続要因を明らかにできる。換金作物や生業との関連も検討しながら、井川の集落および関連地域の比較調査を並行して行い、井川地域の土地利用や作物栽培の特徴を深く捉えていくことが課題である。